

医論第188号

(別紙様式第3号)


論 文 要 旨

論 文 題 目

Endoscopic and histopathological study on the duodenum of

Strongyloides stercoralis hyperinfection

(糞線虫症過剰感染における十二指腸の内視鏡および組織学的検討)

氏 名 岸本一人 

(別紙様式第 7 号)

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	岸本 一人
論文審査委員	審査日	平成 20 年 5 月 1 日	
	主査教授	加藤 誠也	
	副査教授	上 里 博	
	副査教授	久木田 一朗	
(論 文 題 目)			
Endoscopic and histopathological study on the duodenum of <i>Strongyloides stercoralis</i> hyperinfection			
(論文審査結果の要旨)			
上記論文に関して、研究にいたる背景と目的、研究内容、および研究成果の意義と学術的水準について慎重に検討し、以下のような審査結果を得た。			
1. 研究の背景と目的			
糞線虫は自家感染のため感染が長期に持続し、免疫抑制状態では過剰感染や播種性感染を来たし致死的となりうる。糞線虫は十二指腸に寄生するため内視鏡検査は診断に有用であるが、過剰感染を来たした症例の内視鏡像について多数例での検討は行われていない。本研究では過剰感染を来たした糞線虫症の臨床像と十二指腸内視鏡所見、組織所見について多数例で検討し、それらの特徴と関連性を明らかにすることを目的としている。			
2. 研究内容			
1984～2006 年に、治療前に上部消化管内視鏡検査を施行された過剰感染を来たした糞線虫症 25 例 (男性 15 例, 女性 10 例, 平均年齢 63.0±14.1 歳) を対象とし、臨床像, 十二指腸の内視鏡所見, 病理組織学的所見について後ろ向きに検討した。十二指腸の内視鏡所見は軽度 1 点, 中等度 2 点, 重度 3 点と点数化し, 合計点数を十二指腸炎のスコアとした。			
主な症状は, 嘔吐 13 例 (52%), 腹痛 10 例 (40%), 下痢 8 例 (32%) などで, 6 例は播種性感染を呈し, そのうちの 2 例が死亡した。24 例 (96%) が免疫抑制状態にあり, 原因として HTLV-1			

感染が最多 18 例 (72%) であった。内視鏡での異常所見は 23 例 (92%) に認められ、主な所見は浮腫 16 例 (69.5%)、白色絨毛 13 例 (56.5%)、発赤 9 例 (39.1%) などであった。十二指腸から生検を行った 22 例中 15 例 (68.1%) で組織中に糞線虫の虫体が認められ、虫体陽性群は陰性群に比べ、内視鏡所見が有意に重度であった (4.86 ± 2.47 vs 2.71 ± 1.38 , $P < 0.05$)。25 例中 6 例は、腸閉塞のため便が得られない症例、あるいは検便で幼虫が認められない症例であり、十二指腸の生検からのみ診断が得られた。

3. 研究成果の意義と学術的水準

本研究は、過剰感染を来たした糞線虫症の十二指腸内視鏡像について、臨床像、病理組織所見を含めて検討したものである。従来は症例報告や数症例での検討は報告されていたが、今回のような多数例での報告はなされていない。本研究でも従来より指摘されていたように HTLV-1 感染と糞線虫症、特にその過剰感染との関連性、播種性糞線虫症の高い死亡率が認められ、更に糞線虫感染を疑うべき十二指腸の内視鏡所見、特に白色絨毛像が本症では比較的特徴的な所見であることが示唆された。また内視鏡所見と生検組織での虫体の検出率や粘膜病変の重症度との関連性が示された。糞線虫感染は免疫不全患者に致死的な経過をもたらす可能性のある反面、イベルメクチンなどによる薬物療法の奏効率が高く、早期の診断、治療が必要であるが、今回の研究は、従来の普通寒天平板培養法による便検査に加えて、十二指腸内視鏡検査や生検の有用性を明らかにするものである。よって研究成果は国際的にも認められる高水準のものであると評価される。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A 4 とし縦にして左横書とすること。
 - 2 要旨は 800 字～1200 字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。